

新しい“受験競争の時代”の到来 ——学習の量的拡大と質的变化——

法政大学准教授 寺崎 里水

1 「脱受験競争」から学習への回帰へ

2006年（第4回）調査は、高校生の「脱受験競争時代」の傾向をより鮮明に示していた。小・中学生の学習時間が増加に転じたのに対し、高校生の学習時間減少には歯止めがかかっておらず、小・中・高校生のなかで、高校生がもっとも学習時間の短い集団であることが明らかにされた（耳塚 2007）。加えて、学習習慣を保持し、依然として受験競争を続ける一握りの高校生に対して、受験競争から降り、学習から離脱した多くの高校生という学習習慣の局所化、競争の分化の傾向が観察された（耳塚 2007）。学力向上のためのさまざまな取り組みにもかかわらず観察されたこのような事態は、少子化と大学受験プレッシャーの低下した「脱受験競争」の時代に、高校生を学習へと動機づけることの困難さを課題として示したのである。

それからおよそ10年が過ぎた。2015年の第5回学習基本調査の結果からは、この課題に高校や高校生たち、ひいては日本の社会がどのように取り組んできたかをうかがうことができる。2015年調査のもっとも特徴的な結果は、学習への回帰ともいべき現象である。

(1) 学習への回帰

学校外の学習時間、家庭で学習する日数とともに全体で大きく増加に転じた（図2-1-1、p.69、図2-2-1、p.73）。家庭で学習する日数について1990年から2015年までの5回の調査結果を通してみてみれば、2015年調査は「ほとんど毎日する（35.4%）」がもっとも多く、「家ではほとんど勉強しない（15.6%）」がもっとも少ない結果となった（図2-1-1、p.69）。2001年、2006年と縮小していた高校生の学習は、再び、量的に拡大する傾向をみせたのである。

また、家での勉強の様子をみると、「計画を立てて勉強する」「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」「授業で習ったことはその日のうちに復習する」など、すべての項目で増加し、「『勉強は学校だけですればいい』と思う」は37.0%→38.8%→34.5%（2001年、2006年、2015年）と減少している（図2-6-1、p.91、図2-6-2、p.92、図2-6-3、p.93）。全体的にまじめに勉強に取り組む生徒が増えていることがわかる。

家庭学習に限らず、学校の勉強についても、教科の好き嫌い、教科の理解度をみると、前回よりも「好き」「わかっている」の値が上昇し、全体的によい結果を示している（図1-1-2、p.56、図1-2-3、p.59）。学

校の勉強が「好き」で「わかっている」ことは、学習時間の上昇や家庭学習に対する取り組みにより影響を及ぼすだろう。2006年調査からおよそ10年を経て、脱ゆとり路線、学力向上政策が、高校生においても効果を示しはじめたと評価することができる。

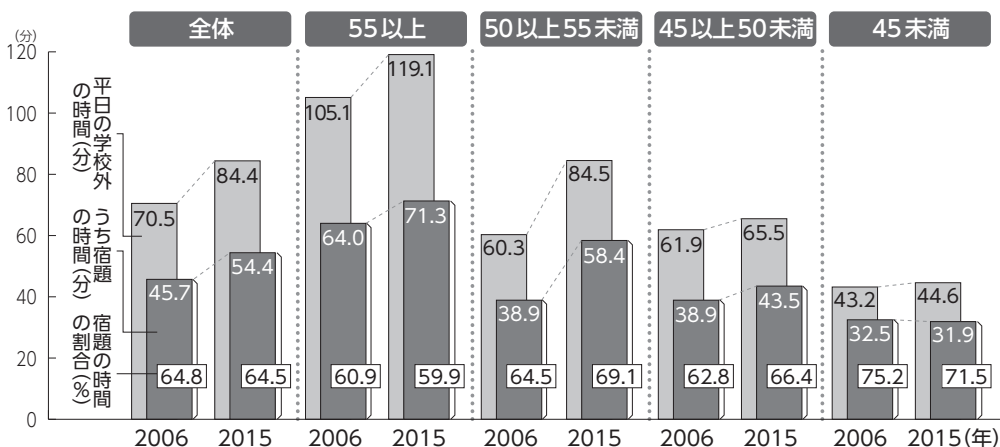
(2) 学校の取り組みの影響

学習への回帰をもたらした一つの要因に、学校の取り組みが考えられる。1990年調査から減少し続けてきた「学校で朝や放課後の補習授業を受けている」「今年の夏休みに、学校が行う補習授業を受ける予定だ」は、今回、わずかだが上昇に転じた（図3-1-3、p.115）。また、テスト勉強の開始時期について、「2週間くらい前から」が2006年調査に比べると大幅に増加し、高校生が以前に比べて計画的にテストの準備をしている様子が見えてくる（図2-7-3、p.101）。学校に個別に行ったヒアリングからは、テスト前に学習計画を立てることを課題とするなど、学校による取り組みが背後にあることがわかっている。高校は生徒の学習に積極的に関与し、学校生活へ彼らを取り込もうとするは

たらきかけを強めている。

さらに、今回観察された学校外の学習時間の増加について、学校が課す宿題がその一因であることも明らかになっている。平日の学習時間の平均は、2006年調査の70.5分から、2015年調査では84.4分に上昇した。その時間のうち、学校の宿題や課題をする時間の平均は、2006年調査の45.7分に対し、2015年調査では54.4分だった（図3-1）。学習時間の増加分13.9分のうち、宿題による増加分が3分の2を占めており、生徒たちが宿題以外に勉強した増加分はわずか5分ほどだったことになる。とくに偏差値50以上55未満の高校では、2006年調査の60.3分から2015年調査では84.5分と大幅に学習時間が伸びた。宿題の時間に目を向けると、38.9分から58.4分にこれまた激増しており、24.2分の学習時間の増加分の多くは宿題の増加が担っていることがわかる。宿題時間の増加はほぼすべての偏差値帯の高校で観察できたことから、高校が宿題を課し家庭学習の時間を強制的につくりだすことで、家庭学習を習慣づけようとする取り組みを積極的に行っていることが推察される。

図3-1 平日の学校外の学習時間のうち、宿題をする時間（高校生、学校偏差値帯別）



2 新しい「受験競争時代」の様相

学習への回帰ともいうべき現象を裏づけるように、高校生の意識にも変化がみられた。

(1) 学歴志向・達成意欲の高まり

社会観・将来観をみると、「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる（38.1%→50.9%）」「将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい（51.8%→62.8%）」といった項目で、2006年調査に比べて10ポイント以上の上昇がみられた（図4-3-1、p.133、図4-3-2、p.135）。また、成績観・学力観について、1990年から2015年までの5回の調査を比較すると「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい（54.3%→51.4%→54.9%→58.7%→67.0%）」が上昇した一方で、「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない（25.6%→27.2%→23.6%→22.7%→13.8%）」が低下した（図4-1-1、p.127）。これらから、学校の勉強を介した達成に対する意欲、すなわち、いい成績をとっていい大学に進学し、いい仕事について幸せになるという価値観の復活がみてとれる。

2006年調査では、「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」「お金がたくさんあると幸せになれる」「将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい」といった項目で、1996年調査からの変化の傾向が学校偏差値によって異なっており、1990年代以降の学歴志向や学習の価値の相対化言説が、すべての高校生に等しく影響を与えていたわけではないことがうかがえた。しかし、2015年調査ではすべての偏差値帯の学校でこれらの項目を肯定する割合が上昇し、いい成績をとっていい大学に進学し、いい仕事について幸せになるという価値観が、すべての偏差値

帯の学校で強まっている傾向が示されたのである（図3-2）。

(2) 学校の勉強の万能観

学習の価値を高く評価する傾向は他の項目でも明らかであった。学校の勉強の効用をみると、一流の会社に入ったり、出世したりといった職業生活そのものへの効用を重視するだけでなく、「心にゆとりがある幸せな生活を送るために」「趣味やスポーツなどで楽しく生活するために」など、豊かな生活や充実した生活にとって、また、「尊敬される人になるために」「よいお父さん、お母さんになるために」など、人格形成そのものにも役立つと考える様子がみてとれる（図4-2-3、p.131）。学校の勉強の効用に対するこのような意識は、すべての偏差値帯の学校で、かつ「とても役に立つ」の顕著な上昇というかたちで観察された（図3-3）。2006年調査までは、学歴よりも自己実現を志向するというように、学歴と自己実現が相容れないものとして考えられ、この観点から若者の学習離れが指摘されてきた。しかし2015年調査が示すのは、学歴も自己実現も、将来のすべての満足度の向上を学校の勉強が保証してくれるかのような学校の勉強万能観である。

(3) 「競争への意欲」の再加熱

大学進学希望者に占める「できれば推薦入試やAO入試で」を希望する割合は、学校偏差値ごとに差はあるものの、すべての偏差値帯の学校で2006年調査からの大幅な減少がみられた（図5-4-3、p.165）。「できれば一般入試で」という回答の高まりを、学習への熱心な取り組みを学力選抜というかたちで正当に評価してほしいという態度のあらわれと考えるなら、上でみてきたことともあわせて、1990年代と同じような、よい学歴をめぐる受験競争の圧力が再び高まっているよ

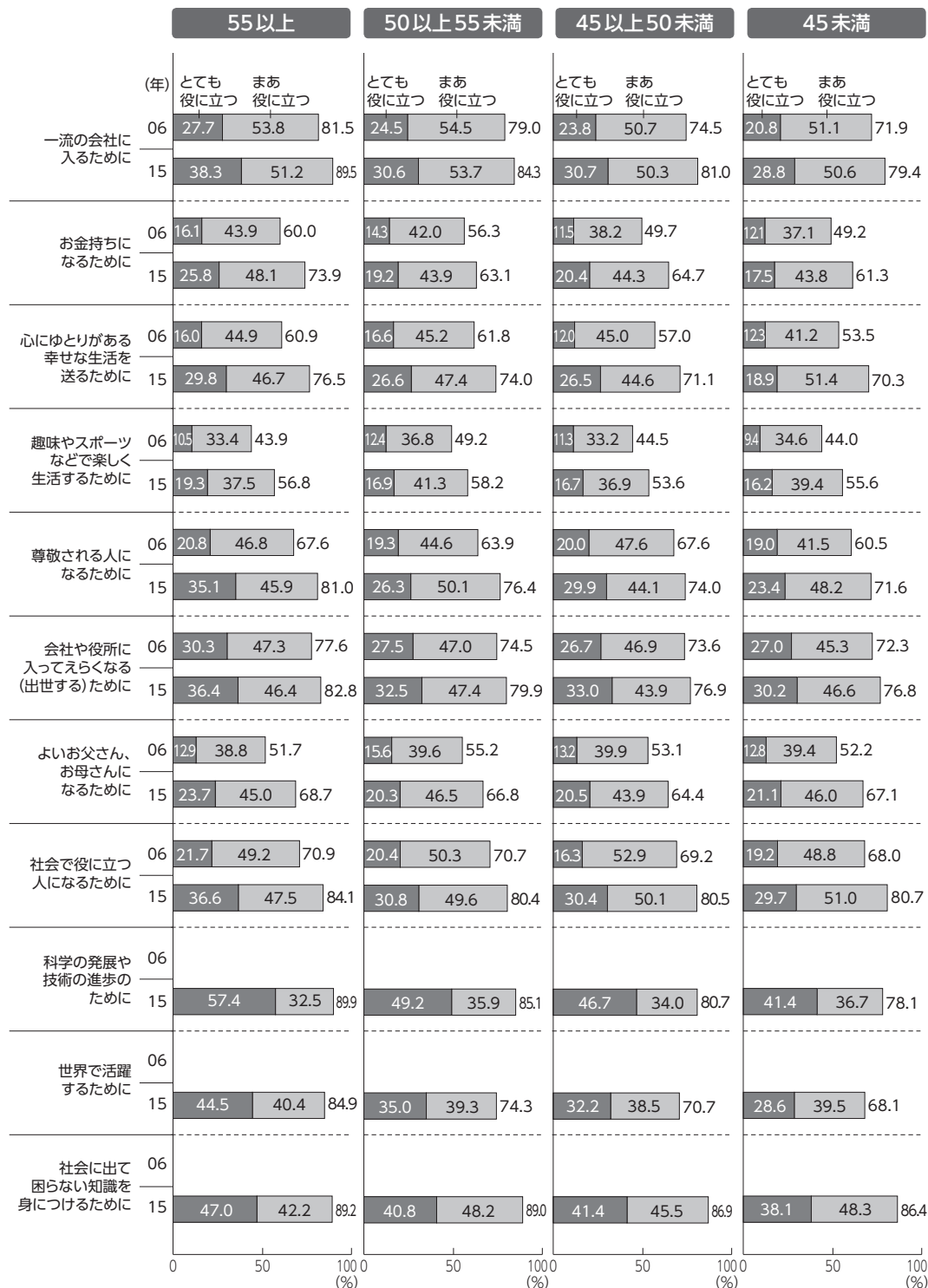
図3-2 社会観・将来観（高校生、学校偏差値帯別、経年比較）



注1) 「数学は男子のほうが向いている」は、1996年は「数学は男子のほうが、国語は女子のほうが向いている」としてたずねている。

注2) グラフのない調査年はたずねていない。

図3-3 勉強の効用（高校生、学校偏差値帯別、経年比較）



注) グラフのない調査年はたずねていない。

うにみえる。

しかし、2015年調査からみえてくる競争への意欲、達成意欲の高まり、あるいは高学歴志向は、1990年代のそれとは若干異なっているようである。「自分は生まれつき頭が悪いのではないかと思う」「努力しても成績が思うように上がらない」といった項目を肯定する割合は1990年調査から少しずつ上昇してきているものの、「親の期待が大きすぎる」は20.2%→16.1%→12.3%→13.4%→14.3%と、2000年代に下がったまま、2015年調査でも大きな変化は見られない。「世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい」「どうしてこんなことを勉強しなければいけないかと思う」といった学校の勉強の効用への疑いを示す項目、あるいは「上手な勉強の仕方がわからない」「もっと科目の数を減らしてほしい」といった勉強をめぐる焦燥感や疲労感を示す項目では、むしろ2015年調査では値が減少しており、かつてのような熾烈な受験競争プレッシャーとは様子が異なってみえる(表4-5-3, p.149)。

3 学習動機としてのキャリア教育の浸透

少子化と大学受験プレッシャーの低下という事態が、このおよそ10年で大きく変わったということはない。では、何が学習や競争への意欲をかき立てているのだろうか。

明らかなのは、2015年調査対象の高校生は、小・中・高校を通してキャリア教育が実施されるようになった世代であるということだろう。2006年調査の時点では、小・中・高校のいずれにおいても、キャリア教育の機会も内容も、現在ほどは充実していなかった。2015年調査では、授業のなかで「進学する学校や将来の仕事について調べたり考えたりする」学習、「学んでいることが自分の将来

にどう関係するかを考える」学習をするという高校生は、「よくする」と「時々する」を合わせると77.3%、65.2%と高い割合を示した(図1-4-1, p.66)。進学先や将来の仕事について、今学んでいることと関連づけながら考える機会が増えたことで、学習や競争への意欲が変わってきたと考えることができる。また、大学生の就職難や若年者の労働環境の悪化、非正規雇用の増加・貧困化といった事柄が社会問題化し、ニュースなどで頻繁に目にするようになったことが影響を及ぼしている可能性もあるだろう。

将来のキャリアを見据えた結果、学習の価値を高く評価し、よりよい地位達成を志向し、実際の学習行動へと結びつけていくことそのものは、おおむね好意的にとらえることができる。しかし、高校/大学を卒業し、正規雇用で就職して、終身雇用として年功序列で働き続けるといった「標準的キャリアモデル」は崩壊した、あるいはそのようなパイは縮小していると言われるようになってすでに10年以上が経過した。いい成績をとっていい大学に進学し、いい仕事について幸せになるという価値観の復活は、その意味ではリスクをともなっている。また、前項でみた学校の勉強万能観ともあわせて考えたとき、そういった価値観が、「今、学校の言うとおり、きちんと長時間勉強しなければ、将来しんどい生き方をすることになるかも」という強迫観念を高めたり、「将来のひどい働き方やつらい生活は、学校にいる間に自分が努力をしなかったからである」というような自己責任の言説を引き受けさせたりすることもリスクとして考えうる。学んでいることと将来とを結びつけていく学習が、多様なキャリアのあり方を引き受け、社会に出たあとも学習者として学び続けていく自信と力を与えるものであるよう、いっそうの配慮が必要である。

4 学習の質はどう変わっていくのか

2015年調査のもっとも特徴的な結果として、学校外の学習時間の増加、家庭学習への取り組みの改善といった学習への回帰傾向をあげ、その原因として、授業の理解度の上昇(学び本来の楽しさ説)や学校による取り組みの成果(学習課題増加説)、あるいは勉強の効用観や達成志向の上昇(受験競争動機説)をみてきた。程度の差はあるものの、すべての高校で観察された学習時間の量的拡大は、どのような内実を伴っているだろうか。学習の方法に注目してみたい。

(1) 家庭での学習方法

「教科書やテキストをくり返し読む」「プリントや問題集で数学の問題練習をする」は2006年調査より大きく上昇している(図2-4-1、p.85)。また学習方法のタイプに目を向ければ、「通信教育、学習塾の教材や自分で買った教材中心」よりも「学校で使う教材中心」、わからないところがあれば「自分で考える」よりも「先生や友だちに聞く」という傾向は、1990年調査から2006年調査までと同様、2015年調査でも観察され、高校生の一貫した傾向といえる(図2-5-2、p.89)。

細かくみると、学校偏差値によって、学習の方法は少し異なっている(図3-4、図3-5)。より偏差値の高い学校の生徒が行っている学習の方法は、「参考書を読む」「辞書(英語・国語など)を引く」「図鑑や事典で調べる」、「市販の単語帳・単語カードを暗記する」といった項目である。また、「やさしい問題を数多く解く」よりも「難しい問題をじっくり考える」傾向、「できるだけ暗記しようとする」よりも「できるだけ考えようとする」傾向も、偏差値の高い学校の生徒に多い。偏

差値の高い高校では、参考書や辞書を使って、難しい問題をじっくり考えたり、わからないところを解決しようとしたりするなど、相対的に自律性の高い学習方法を行っているといえる。

偏差値の低い学校の生徒ほど行っている学習方法は、「できるだけ考えようとする」よりも、「できるだけ暗記しようとする」こと、「難しい問題をじっくり考える」ことよりも「やさしい問題を数多く解く」こと、英単語や漢字を「くり返し書いて覚える」ことである。学力に課題を抱える生徒が多く集まる学校では、英単語や漢字を繰り返し書いたり、やさしい課題を繰り返し解いたりするなど、反復練習、暗記中心の学習がより多く採用されているといえる。こうした方法で基礎学力の定着が目指されていると考えることができる。

(2) 学校での授業方法

好きな学校の授業方法について「やっていない」という回答に注目してみると、「先生が黒板を使いながら教える授業」「ドリルやプリントを使ってする授業」という伝統的な授業方法は、「やっていない」がほとんどおらず、依然として学校での主要な授業方法であり続けている(図1-3-3、p.62)。「学校外のいろいろな場所に行つてする授業や調査(29.0%→23.4%→31.6%)」、「いろいろな人に話を聞きに行つてする授業や調査(32.2%→30.3%→33.3%)」は「やっていない」割合が高い。また、「パソコンやタブレットを使ってする授業(36.8%→18.1%→32.2%)」は一時的なブームが去ったようにみえる。

一方、個人やグループで「何かを考えたり調べたりする授業」「友だちと話し合いながら進めていく授業」も、「やっていない」という回答はどの偏差値帯の学校でもわずか

図3-4 学習の方法（高校生、学校偏差値帯別、2015年）

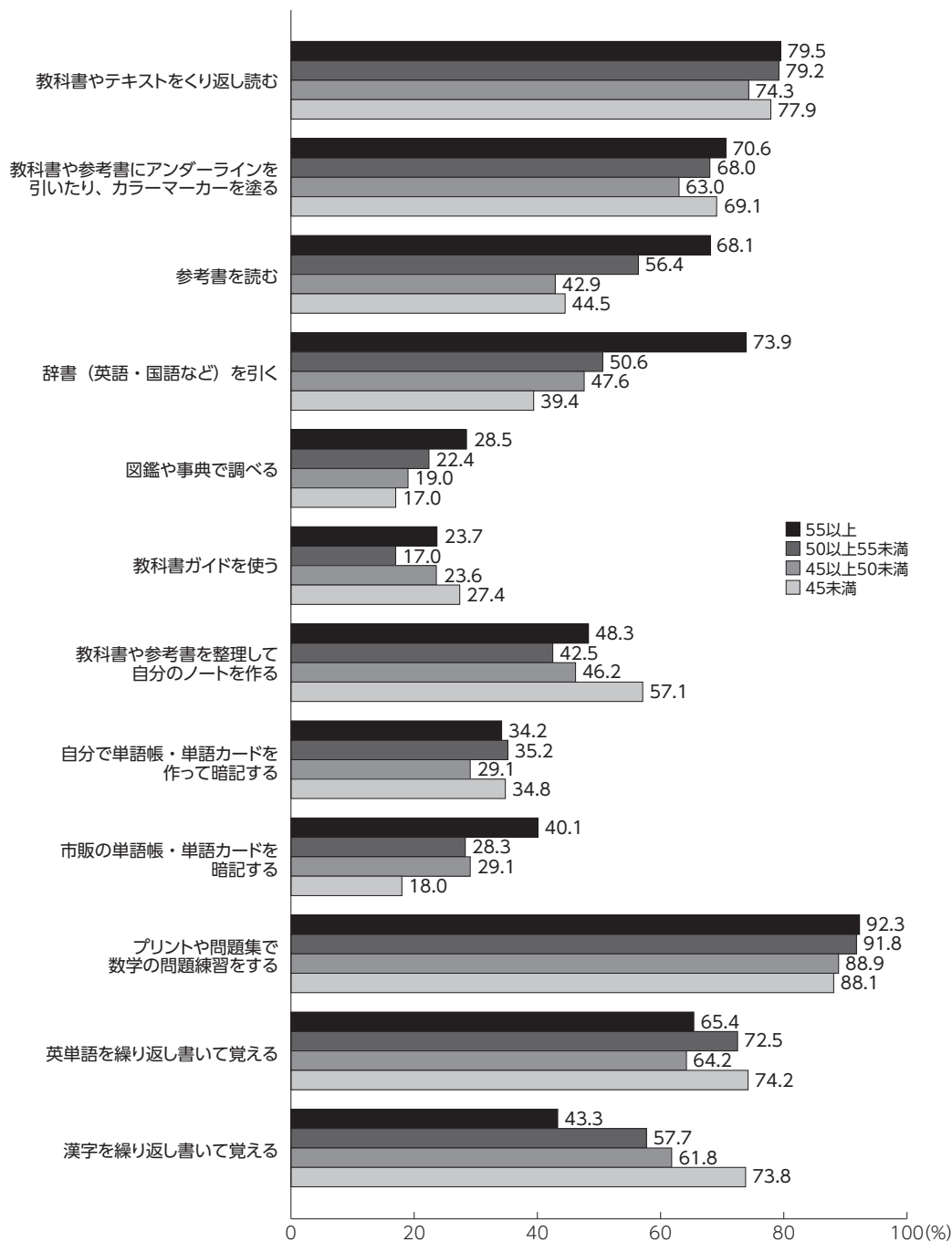
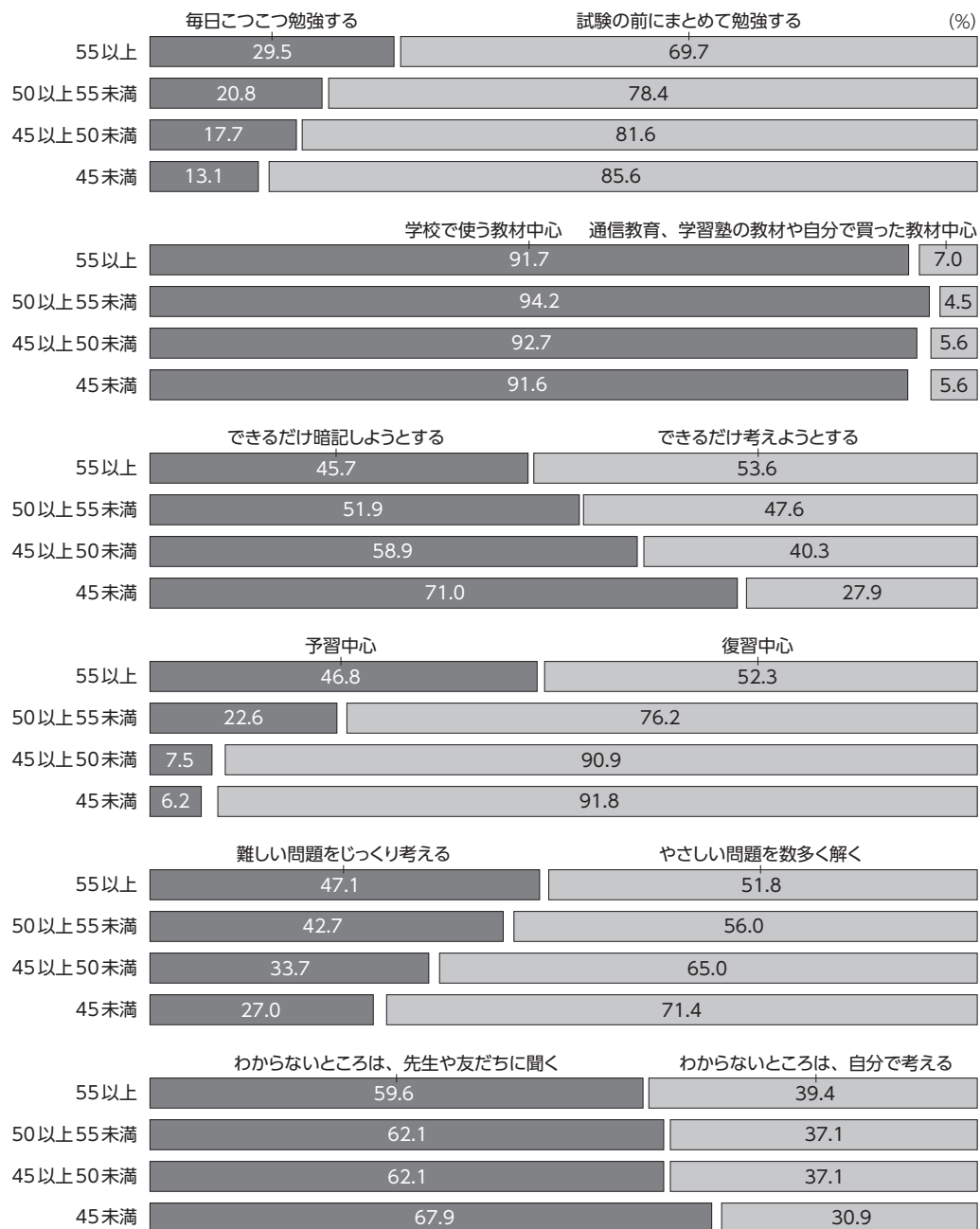


図3-5 学習方法のタイプ（高校生、学校偏差値帯別、2015年）



で、ほとんどの学校で調べ学習が取り入れられているといえる。自分たちで何かを調べたり考えたりする調べ学習の活動については、過半数の生徒が好きだと回答している。これらの授業方法を好きだという割合は、2006年調査では、偏差値55以上、偏差値50以上55未満よりも偏差値45以上50未満、偏差値45未満の高校で高かったのだが、今回、偏差値55以上、偏差値50以上55未満の割合が上昇し、順位が逆転している（図1-3-6、p.64）。

調べ学習について、さらに生徒が授業中にやっている学習活動に基づき、「個人的」か、「協働的」かに分けて結果をみた（表3-1）。すると、個人的学習はどの偏差値帯の学校でも、学習を行うという割合はだいたい同じであったが、協働的学習をみたとき、学校偏差値によって学習を行う割合には差があり、偏差値の高い学校ほど活動をしている割合が高いことがわかる。調べ学習を個人で行うのか、他人と協働して行うのかという差は、協働的学習によって培われる他人との交渉力、調整力といったコミュニケーションのスキルに影響を及ぼすだろう。

(3) 学習の量的拡大と質的变化

みてきたように学校の偏差値や生徒の学力レベルに合わせた学習方法が選択されることで、生徒に必要な以上の焦燥感や疲労感を抱かせない、新しい「受験競争時代」プレッシャーは成り立っている。言い換えるなら、学校や生徒個人々の事情に応じて学習の内容や方法が柔軟に選択されることによって、すべての学校で、学習時間の量的拡大という「同じ」現象として学習への回帰を経験することが可能になったといえよう。学校の偏差値や生徒の学力レベルによって内容は質的に異なっているものの、同じ時間、家庭学習を行うことで「学習をした」という達成感や満足感、その努力が将来のキャリアのなかで報われるべきだという価値意識は全体で共有されているということである。

学習の量だけでなく質の変化に注目することの重要性を示唆する結果が一つ得られている。学習方法がどんなタイプであるかを分類したとき、過去に比べて「復習中心」が顕著に増加していた（図2-5-2、p.89）。この点について、1990年調査から2015年調査の結果を学校偏差値帯別にみたとき、今回

表3-1 能動的な学習の実施率（高校生、学校偏差値帯別、2015年）

(%)

	55以上	50以上55未満	45以上50未満	45未満	
個人的	インターネットを使って何か調べる	57.9	57.5	55.8	47.7
	どのように調べればよいかを考える	50.5	49.9	46.5	45.6
	観察・実験や調査などで考えを確かめる	38.1	39.9	35.5	37.9
	調べたことを文章にまとめて提出する	35.6	41.6	33.3	31.4
	自分の関心にあった学習テーマを決める	30.7	34.5	27.7	31.2
	自分の考えを図表や写真などを使って表現する	26.4	30.8	26.7	22.4
協働的	テーマについてグループで話し合う	72.0	60.2	55.7	51.4
	友だちの意見を聞いて自分の意見と似ている点や違っている点を考える	67.2	55.7	52.2	45.9
	グループで話し合った内容をまとめる	65.0	56.9	51.2	48.1
	学習のまとめをみんなで発表する	39.8	37.7	32.5	26.2
	グループで活動をふりかえって何が良かったか悪かったかを考える	24.2	30.2	21.9	20.3
	環境問題や地域の課題の解決方法について考える	22.9	17.0	14.6	19.0
学校外のいろいろな人に話を聞きに行く	12.9	14.6	10.7	15.0	

注) 「よくする」 + 「時々する」の比率。

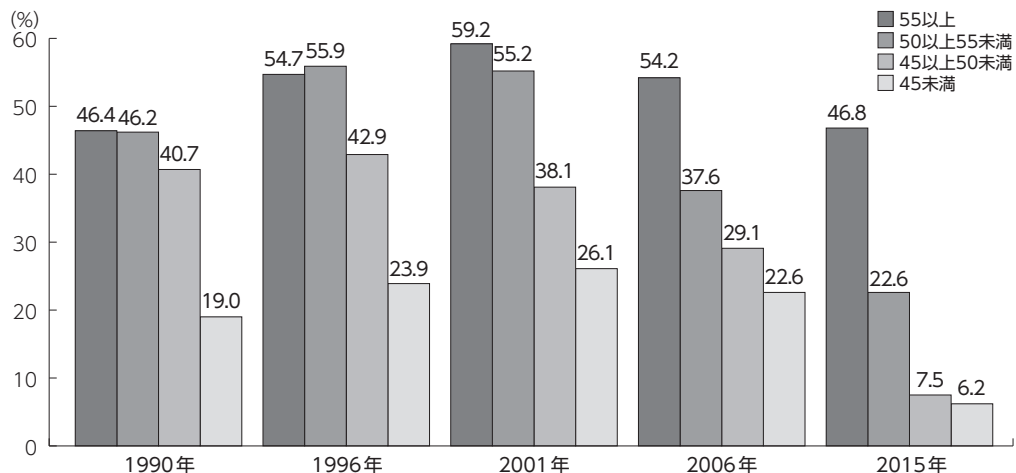
の調査に限って、偏差値45未満、偏差値45以上50未満、偏差値50以上55未満の高校で「予習中心」が激減し、結果として「予習中心」の学習の方法が偏差値55以上の高校だけに顕著にみられる学習方法になったことがわかった（図3-6）。

学習時間の減少に歯止めをかけるために、学校が課題を課すなどしたことはすでにみた通りである。結果として、予習するという習

慣が偏差値45未満、偏差値45以上50未満の高校から奪われたようにみえる。学習の量を拡大しようと試みた結果、学習の質が変化した例といえる。

質の変化を伴った学習の量的拡大がどのような結果をもたらすのか、新しい「受験競争の時代」が、今後定着するのかも含め注視していく必要がある。

図3-6 学習のタイプ「予習中心」の割合（高校生、学校偏差値帯別、経年比較）



注)「あなたの勉強の仕方を分類するとすれば、どんなタイプになるとお考えですか。どちらかといえば近いほうのタイプに○をつけてください」の質問に対して、「予習中心」「復習中心」のうち「予習中心」と回答した比率。

【文献】

耳塚寛明, 2007, 「学習基本調査の結果からみえること」ベネッセ教育総合研究所, 『研究所報 VOL.40 第4回学習基本調査・国内調査報告書・高校生版』14-19.